

日本とフィリピン、性的少数者へのまなざし

同性愛など性的少数者どうしの結婚を法律で認めるかどうか、国会でも議論になっている。

私のゼミの学生が性的少数者について、日本とフィリピンの大学生に意識調査を行った。すると、とても興味深い結果が出た。

「同性婚を認めるべきだ」という意見は、日本の方が少し多い。一見すれば、日本の方が寛容だ。

しかし「身近に性的少数者がいるか」という質問に、フィリピンの学生はほぼ全員が「いる」と答え、日本の学生は「いない」と答えた。男女の比率と同様、性的少数者の比率は国によってあまり差はない。つまり日本では、フィリピンに比べ、性的少数者がオープンに表明しづらく、身近にいても気づかれないのである。

また日本でもフィリピンでも、学生の多くは「性的少数者を差別すべきではない」と答えた。ただし、内容が違う。フィピンでは「性的少数者の権利・人権を守り、差別を許さない社会を作るべき」という意見が多い。日本では「性的少数者も一つの個性だ。気にせず普通に付き合えばよい」という意見が多い。つまり日本では、「なぜ性的少数者が一つの個性として尊重されず、普通に生きることができないのか」まで踏み込んで考える姿勢が希薄なのだ。

「家族や恋人など身近な人が性的少数者だと表明したら、どう感じるか」との質問には、フィリピンの学生はほぼ全員が「もっと深く相手を理解したい」と答えた。一方、日本の学生には「抵抗感がある」との答えが多かった。これでは、日本でもオープンに表明しづらいのも当然だ。

「差別をしない自分」から、「差別を許さない社会」へ。大事なことは「身近な問題ではないから気にしない」といった事実上の無関心ではない。見えない隣人への関心と想像力だ。